

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第

卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

織田 萬 神戸 正雄 山本美越乃
河田 嗣郎 本庄 榮治郎 小島昌太郎 財部 靜治
汐見 三郎 黒 正 巖 田 島 順 大國 壽吉
谷口 吉彦 石川 興二

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

田島先生を憶ふ

石川 興 二

大正三年大學に入つて以來今日に至る正に二十年の間引き續いて先生より公私共に一方ならぬ御恩を辱ふした私は、今人間としてのまた經濟學者としての先生について様々な思ひ出に心を充される。

思へば、大學へ入つて先生より經濟原論を聽講したことが、私の經濟學の研究に進み入る第一歩であつた。教場に於ける先生は溫容以て元氣な講義をされ、時には自作の詩をボードに書いて吟じられたこともある。また煙草の煙の立ちこめた教室に入つて來られた

時、自ら禮節の正しい先生は、憤然として學生を叱責されたこともあつた。而も江戸つ子である先生は一度怒れば後は淡々として平常の如く何等のわだかまりもなかつた。教室に於て先生に經濟學を學ぶ外に、私はまた今の樂友會館の位置にあつた弓の道場で先生より弓術を教はつた。其頃先生は跡部先生と共に見えて、熱心に弓を引かれた。弓の會のあと、先生より學生集會所で御馳走になりながら、先生と我々と一緒になつて、元氣な論談に氣焰を擧げたことなど當時ののびやかな學生々活の懐しい思ひ出である。

大學を卒業して大學院に入ることゝなつた後は、指導教授としての先生は、種々なる機會を通じて私の研究を指導し刺戟して下さつた。關西大學に於ける先生の經濟原論の講義を私に代つてする様にこのことであつたので、經濟原論の大家としての先生のあとに大學院學生としての青二才の自分が代はることを恐縮しながらお受けして毎週一度大阪へ行つた。このことは私の研究を非常に刺戟した。また外國から歸つて來てか

らは、立命館大學の經濟原論を、先生のお勧めにより、先生と折半して講義したこともあつた。其外、自分の論文につき、學會に於ける報告につき、懇切な御批評をして下さつた。また時々先生のお内へ上つて御指導を受けた。かくして先生が私の研究に對して與へて下さつた御厚意は、はかり知れないものがあつた。而も先生は弟子を愛するに、全く私心のない眞情を以てされたのである。

昭和二年の秋、先生の遺曆のお祝に同好會の催として汽船を一艘借り切つて竹生島巡りをする事になつた。それは非常な盛會であつた。先生は西國札所長命寺の高い頂まで壯者をも凌ぐ元氣で登られた。歸途かき船に立寄り、それから先生にお伴してお宅まで歸つたが、先生は終日非常な御元氣と御満足で實に心地よい一日であつた。今も私はその日の先生の御様子をあまり〜と思ひ浮べる。

先生の御宅の間近に住んで居る私は先生の御家の横を通つて學校へ來るのであるが、先生が毎朝弓を引い

て居られる元氣な御姿をお見かけして、いつまでも心身の御鍛鍊を忽にされないことに、深く教へられた。

こうした二十年を通じて先生は、武士道的儒學的に深く修養された人格者として一貫して居られた。先生はこの武士道的儒學的的人格をもつて博く東西の經濟學を研究しこれを日本に適用された秀れた經濟學者であつた。先生の經濟原論の聽講をした初に當つて、先生は經濟學を「經國濟民」の學として規定されたが、この概念はこの先生の經濟學を最も適切に定義するものとして考へられる。而も所謂「社會經濟學」が再び「經國濟民」の學としての「國民經濟學」に置き替へらるべき時期に到達した今日、このことは更に深き意味を以て考へられるのである。

先生は現代の世態及び人情を以て「見ヨ極端ナ利己主義拜金主義ハ、往々國民ノ公益ヲ侵シ、過激ナル自由競争ハ絶ヘズ經濟界ヲ攪亂シテ國富分配ノ衡平ヲ失墜セシム。是レ猶可ナリ、爲政者其政權ヲ誤用シテ、少數者若クハ一二階級ノ利益ヲ増進スル爲ニ多數民若

シクハ他ノ各階級ノ幸福ヲ犧牲ニ供セシムルノ政策ヲ行フ事アリ。富豪者其富力ヲ害用シ、自由競争ヲ杜絶シテ、獨占ノ暴利ヲ貪ボリ、益々國富分配ノ衡平ヲ破壊シ、甚シキニ至リテハ爲政者ト富豪者トガ陰ニ互ニ相結託シテ、而シテ醜聲ノ時ニ外ニ聞エ銅臭ノ往々世ニ洩ルルコトアリ。」と述べて居られるが、こゝに奢れる優者に對する先生の義憤が現はれて居る。この義憤が、恐らく青年期の先生を社會主義の研究に近けたところのものであらう。而も「國民の公益」を具體的に重ぜられる先生の立場は社會主義に止まることを許さなかつたのであらう。

先生は「夫ノ功利ヲ唱ヘテ道德ヲ度外ニ措キ陰ニ權門富豪ニ媚フル者アリ。又共產主義社會主義ヲ叫ビテ經濟ヲ忘レ陽ニ多數民衆ノ意ヲ迎フ者アリ。斯クノ如キ説ハ共ニ中庸ヲ得ザルモノニシテ余輩ノ與セザル所ナリ」となし自己の著書を以て「其新奇ノ説ノ世人ノ視聽ヲ聳カス如キモノ無キハ余素ヨリ自カラ之ヲ知ル而モ是レ余ノ竊カニ以テ自己ノ本領ト爲ス所ナリ」と

述べて居られるが、こゝにも一貫せる先生の風格が見られるのである。

先生はこの學的態度を以て資本主義の勃興期並に安定期に於て「經濟濟民」の學を打ち立てられたのである。先生の後輩としての我々に殘されたる仕事は、この先生の學的態度を現代の資本主義の變革期に於て徹底し、以て變革期に於ける「經濟濟民」の學の確立に努力することではなければならない。